盛んで、床木の某は負けて牛を取られ、またある日、鶴岡の某は荷馬車の荷役は出来たが、一杯、二杯と重ねているうち本人は酩いつぶれ、二日目の夕方やっと佐伯に着いたということもあった。

また、こんな話もある。ある山師（伐木業者）が松山を買って伐採をはじめたが、あまりにも材が多く、伐採期間が長びくので測量して見たら、なんと百八十町歩もあったという。ちょっと見当のつかない位の面積である。しかもそれが伐期の来ていた一部分の松山だけのことである。

昭和の初めごろの夏の共有林の下刈りの時の話である。ちょうど筆者も参加していたが、二百余名の大勢で、中尾の学校基本林の下刈をはじめたが地形が複雑で広すぎ、連絡がとれぬようになり、女の人が一人行方不明になった。消防団員をくり出して徹夜で探したが見つからず、翌る日になってやっと探し出した次第です。

もって床木部落の共有林が、どんなに広いかがおわかりでありましょう。

以上は、主任組長の手許に保管している、部落共有林の運営についての記録をしらべて、まとめたものであります。

（つづく）

（注）筆者は以前ずっと床木に居住の方です。（係）

（下段のつづき）、大へん喜ばれました。ところがその本が別にもう一揃い、大分のハレルヤ書店に出ているんです。

もしも、佐伯の研究家のお役に立つなら、そして先生（注・羽柴を指す）のお手許に保存して頂いて、行く行く「佐伯図書館」の出来た時に納本して下さるならば、私の方で買い求めて送本したいと思いますが、どうでしょうか。（下略）（注・羽柴宛私信、掲載方諒承ずみ）

書翰

佐伯に図書館を

大阪　長谷川　等

（前略）　久し振りに帰郷した（注・昨年秋）私の目には、痛い程佐伯の山の緑、川水の色がしみるようでした。

市街地はかなり立派になっていますが、三百年の文化の栄えた城下町佐伯に、図書館一つないことをさびしく思いました。勿論美術館も考古館も、博物館らしいものもありません。（中略）

佐伯から帰ってまもなく、岡山県の倉敷にまいりましたが、城下町佐伯のひからびたような姿とくらべて思い、淋しく思いました。

城山の緑につつまれ、御殿を後ろにして、静かに佐伯の昔を物語り、微笑んで迎えてくれていた三の丸です。私は文化会館を訪れたその時、ここにはこんな建物でなく、むしろ城山と櫓門とにマッチした、美術館か図書館であった方がふさわしいのにと思いました。（中略）

なんとかして、「佐伯文庫」の古い思い出を再現出来るような『佐伯図書館』の建設は出来ないものでしょうか。

以前私は、洋書（医学書）を混じえて五千冊程持っていましたが、戦災で灰燼に帰しました。けれどもその後ぽつぽつ買いためて、おき場に困る位になりました。家内から「もういい加減にしなさい。ねる場所もなくなりますよ」と叱られています。「あなたが死んだらどうするんですか。」と言うから「佐伯図書館に引き取ってもらいますよ。」と言い言い来ています。

時に、私は以前から、各藩の財政を左右していた浪速の戦闘との関係や、所謂「倉屋敷」の歴史を求めて来ました。そして昨年秋「大阪の研究」（全五巻）を入手、私には縁故ふかい大分の地にある県立図書館に寄贈し、（以下は上欄に）